

アリストテレス『形而上学』Λ巻第5章における 現実態と可能態の概念

岩 田 圭 一

はじめに

『形而上学』Λ巻は、後半の第6-10章において不動の動者について考察されていることから、神学が展開されているテキストとして、哲学史上、注目を集めてきた。近年、解釈者たちの間でΛ巻のテキストへの関心が高まっているが、その背景には、Λ巻の全体をアリストテレスの第一哲学の遂行、ウーシアー (*ousia*) 論の一つの展開として理解しようという解釈の流れがある⁽¹⁾。20世紀後半に『形而上学』中心巻 (ΖΗΘ巻) の研究が盛んに行われ、関連するテキストの研究の進展とともに、アリストテレスのウーシアー論の理解が大いに深まった。Λ巻は、そのテキストの読みにくさ——きわめて圧縮的な仕方では書かれているとも評される⁽²⁾——のゆえに、それ自体を詳細に読み込んで、そこから充実した内容を取り出すことが難しい巻である。もちろん、Λ巻後半の神学の部分に関しては、そのテキストは神学の重要な典拠であり、豊かな内容を含んでいると言える⁽³⁾。しかしこれも、『魂論』第3巻における知性論や『自然学』第8巻における運動に関する議論などを参照し、内容を補完しながら読むのでなければ、理解が困難な内容となっている。Λ巻前半 (第1-5章) については、『自然学』第1巻の生成論や『形而上学』中心巻の関連テキストを参照しながら読解することが必要である。

Λ巻は、神学への関心から後半の章が注目されがちであるが、ウーシアー論研究が成熟した状況においては、第一哲学、ウーシアー論の観点からΛ巻全体を捉え直すことで、Λ巻のとくに前半の意義を見直すことが可能になる。これまであまり注目されてこなかったΛ巻前半のテキストについて詳細な検討が行われるようになったことは⁽⁴⁾、『形而上学』研究において意義深いことである。本稿では、諸実体 (および諸属性) の諸原理についての探究が行われるΛ巻前半の考察の中からΛ巻第5章の論述を取り上げ、すべてのものの諸原理としての「現実態 (*energeia*)」と「可能態 (*dunamis*)」が、或る意味ではすべてのものにとって同じ原理であり、他の意味ではそれぞれのもの間で異なる原理である、という見解について考察を行うことにする。とくに1071a3-17のテキストにおける「現実態」と「可能態」について、先行研究の成果も活用しつつ考察することにしたい。

1 諸原理の考察における個別的な観点と類比的な観点との区別

Λ巻第5章の内容は、第4章からの続きであり、すべてのもの（諸実体および諸属性）の諸原理が同じか異なるかという問題を扱っている⁽⁵⁾。Λ巻第4－5章の結論ははっきりしている。すべてのものの諸原理が同じか異なるかは、諸原理をどのような観点で捉えるかによる。一つの観点は個別的な観点とも言うべきものであるが、これは、個々の事例を取り上げて、それぞれの場合で諸原理が異なっているとみなす見方である。アリストテレスは、感覚的物体という実体⁽⁶⁾の諸原理と、色という属性の諸原理、そして昼と夜という属性の諸原理が、それぞれの場合で別々であることを示して、すべてのものの諸原理が異なる場合を説明している。それによれば、感覚的物体の諸原理は熱（形相）と冷（欠如）とこれらを担うもの（質料）であり（*Met.* Λ 4, 1070b11-13）、色という属性の諸原理は白（形相）と黒（欠如）と表面（質料）であり（b20-21）、昼と夜という属性の諸原理は明（形相）と暗（欠如）と空気（質料）である（b21）。ここで、感覚的物体や色が個別的なものとして扱われているのか、普遍的なものとして扱われているのかが問題になりうる。この文脈では、「類（*genos*）」ごとに諸原理が異なると言われており（b19-20）⁽⁷⁾、普遍的なものが問題にされているようにも見えるが、第5章で個別的な形相への言及もあるように、個別的なものの個別的な諸原理が問題にされることになるので、個と区別される普遍についてその諸原理を語っていると断定するのは難しいだろう。いずれにせよ、第4章では、実体の例として感覚的物体が、属性の例として色および昼夜が示され、これらの例の間で諸原理が別々のものであることが示されている。

もう一つの観点は類比的な観点である。この観点を説明する前に、上の三つの例で示される形相、欠如、質料という原理のうち、形相と欠如について少し考えておきたい。ここで挙げられている形相と欠如は、中間をもつ両極と言うべきものである。人間という実体であれば、これは〈人間〉⁽⁸⁾ないし魂という形相をもっているものであり、魂がなくなればそのものは（生きた）人間ではないことになる。感覚的物体における熱という形相について、人間の場合と同じように理解するのは難しい。感覚的物体が感覚されるのは、熱という極と冷という極の間のどこかに位置を占める状態——一定の温度と言えればわかりやすいと思われる——のゆえだと考えられる⁽⁹⁾。人間の形相の場合と同じように考えるなら、熱という形相があれば感覚的物体ということになるが、冷たいものも感覚されることを考えると、感覚的物体の場合と人間の場合とは異なる仕方理解したほうがよいように思われる。色と昼夜についても、人間の場合ではなく、感覚的物体の場合のような理解をすることができるだろう。アリストテレスは、一定の色（色合い）を、白（明）という極と黒（暗）という極の間のどこかに位置づけて理解していたと考えられる⁽¹⁰⁾。また昼夜も、昼の明るさや夜の暗さに一定の幅があることを考えると、やはり明という極と暗という極の間のここからここまでが昼で、ここからここまでが夜であると理解していたものと考えられる。

形相と欠如をこのような極と捉えることは、形相と欠如を原理とみなすことにとって好都合であると考えられる。というのも両極がなければその間のものは規定できず、その意味で両極は原理であると言えるからである。アリストテレスは『気象論』において、湿った蒸発物と乾いた蒸発物について説明する際、「湿ったものが乾いたものなしにあることも、乾いたものが湿ったものなしにあることもないのであって、これらはすべてその〔どちらかの〕優勢によって〔乾いたものとか湿ったものと〕語られるのである」(*Meteor.* II 4, 359b32-34) ([]は筆者による補足)、と述べているが⁽¹¹⁾、これも、ここで示した形相と欠如の理解を支えるものと言えるだろう。

三つの例における形相と欠如が、人間の形相や欠如のような場合とは異なることを見たところで、すべてのものの諸原理が同じであると言える観点、すなわち、類比的な観点について見ることにしよう。アリストテレスはΛ巻第4章のはじめで、「普遍的に、または類比的に語る (*katholou legēi tis kai kat' analogian*)」場合、すべてのものの諸原理は同じであると述べている (Λ 4, 1070a32-33)。これは、先に見たような例を見比べて、普遍的に見れば、諸原理は同じだということである。上の例で言えば、三つの例のどれにとっても、形相、欠如、質料が共通する原理である。これは原理の内容ではなく、形式に注目しており、L. Judsonはこれを、諸原理の「図式的な把握」(*schematic conception*)と呼んで、先の個別的な観点——彼は「具体的 (*concrete*) な把握」と呼ぶ——と区別している⁽¹²⁾。呼び方はともかく、形式に着目すれば、すべてのものに共通の原理として形相、欠如、質料があるということをアリストテレスは言っていることになる。類比的という点に着目するなら、熱および冷とその担い手との関係は、白および黒と表面との関係、そして明および暗と空気との関係と同じであると説明することができるだろう。また、熱と冷との関係も、白と黒との関係、そして明と暗との関係と同じであると言える。こうした関係性を踏まえて、それらの具体的な内容は、形相、欠如、質料として、普遍的、形式的に捉えられる。この普遍的、形式的な観点との対比で、事物(の種類)ごとに原理が異なると捉えることは、個別的な観点に立っていると言うことができる。ここで、事物の種類ごとに原理が異なるのであって、同じ種類のものでも個々別々の原理があることまでは言われていない点に注目するなら、「個別的な観点」という言い方をすることに抵抗が感じられるかもしれない。しかし、「個別的」という語をゆるい意味に解して、個別的な観点で諸原理が異なることを、諸原理が個々の種類ごとに異なるという意味に解することも不可能ではないだろう。

以上はΛ巻第4-5章における結論的な考えである。この考え自体は明確であるが、途中の論述には、多様な解釈を許すような不明瞭な説明が見られる。以下、第5章のテキストに沿って読解を進め、そこで用いられる「現実態」と「可能態」について考察することにしたい。

2 原理としての現実態と可能態

アリストテレスはΛ巻第5章の冒頭の一節 (Λ 5, 1070b36-1071a3) で、属性に対する実体の

優位性についての見解を提示する。これは、属性は実体なしには存在しえないので実体から離れてありえないが、実体は属性から離れてありうるという、『カテゴリー論』から見られる基本的な見解 (*Cat.* 2, 1a24–25, 5, 2b3–6, *Ph.* I 2, 185a31–32, *Met.* Z 1, 1028a33–34, Λ 1, 1069a24) である。 Λ 巻第4章からのアリストテレスの関心は、すべてのものの諸原理が同じか異なるかということであるが、ここでアリストテレスは、実体の優位性の主張が実体の原因性を示していることに注意を向ける。すなわち、実体は属性から離れてありうるが、属性は実体から離れてありえないということから、「すべてのものの諸原因は同じである (*pantôn aitia tauta*)」と述べている (1071a1)⁽¹³⁾。これは、すべてのものの諸原因として実体の諸原因があるということの意味していると考えられる。もちろん、前提として、実体以外のものにとっての原因は実体であるということがある。実体には質料や形相などの原因があるが、実体を原因とする他のすべてのものにとっても、実体の質料や形相などが原因であることになる。本稿の1で見たように、この場合、類比的ないし普遍的な観点から、すべてのものの諸原因は同じであると言われていることになる。個別的な観点では、教養あるソクラテスについて言えば、教養の原因はソクラテスであり、ソクラテスの魂と身体である。白い箱について言えば、白の原因は箱であり、〈箱〉という形相と木材という質料である。個別的な観点では、それぞれの属性の原因は異なっている。 Λ 巻前半では、『自然学』第1巻などに見られる質料形相論が前提にされており、実体を分析した諸要素が原理・原因とみなされるのが基本である。しかしその前提として、そうした分析以前の、属性に対する実体の優位性、原因性⁽¹⁴⁾がアリストテレスの念頭にあることを忘れてはならない (cf. Λ 1, 1069a19–24, Λ 5, 1070b36–1071a3, Λ 6, 1071b5)。

Λ 巻第5章冒頭の一節の後、アリストテレスは、「他の仕方では」と述べて、すべてのものの諸原理が類比的な観点では同じであり個別的な観点では異なることについて、質料形相論に基づいた考察を行っている。これは本稿の1で見た内容と同様のものであるが、この一節ではとくに「現実態」と「可能態」が原理として取り上げられている。これらの概念はそもそも形相や質料に適用されるものであり、形相や質料を原理として立てて考察することとそれほど変わりはないように思われる。しかしながら、テキストを読むと、ここでの「現実態」と「可能態」の用法をめぐって解釈上の問題が生じてくる。この箇所のテキストは以下のように始まっている。

そしてさらに、他の仕方では、類比によって、同じものども——例えば現実態や可能態——が諸原理である。しかしこれら〔諸原理〕は、異なるものどもにとっては〔個々のものごとに〕異なっているし、また異なる仕方においてある。というのは、いくつかの場合、同じものが或るときには現実的に (*energeiai*) あり、他のときには可能的に (*dunamei*) あるからである。例えば酒や肉や人間がそうである。 (Λ 5, 1071a3–7)

この引用の最初の文で、現実態と可能態は、すべてのものにとって同じ原理として言及されている。そしてその後で、個別的な観点からすれば、原理としての現実態と可能態が個々の例で異なっていることが示される。例えばソクラテスと木製の箱について言えば、ソクラテスは現実態としての魂（形相）と可能態としての身体（質料）を原理としており、木製の箱は現実態としての〈箱〉（形相）と可能態としての木材（質料）を原理としている。個別的な観点では、このように現実態と可能態とが内容的に異なっている。しかし、類比的ないし普遍的な観点では、ソクラテスにとっても木製の箱にとっても、現実態と可能態という同じ原理がある。このように理解すれば何も難しいことはないように思われるが、個別的な観点で諸原理が異なっていることの説明（「というのは」以下）が、上に引用した一節の理解を困難なものにしている。その説明では、「同じものが或るときには現実的にあり、他のときには可能的にある」と述べられ、その例として酒、肉、人間が挙げられている。この説明は、個別的な観点では現実態と可能態がそれぞれの例で異なっていることを説明するはずのものであるが、一見したところ、「というのは」以下の内容は、そのことを説明しているようには思われぬ。現実態と可能態の内容が個々の例で異なってくることを説明してほしいのであるが、「というのは」以下の内容は、或る種類のものが現実態として捉えられる場合もあれば可能態として捉えられる場合もあるということを示しているように思われる。

「同じもの」の例として酒、肉、人間が挙げられており、これらの例を手がかりに考えることになるが、例えば酒は、或る場合には現実的に酒であるものであり、他の場合には可能的に酔であるものであると考えられる⁽¹⁵⁾ (cf. H 5, 1044b34-36)。この場合、現実的に酒であるものは、発酵させて作った生成物としての酒であり、可能的に酔であるものは、腐って酔になるだろうものとしての酒である。どちらも目の前にある同じ酒であるが、前者と後者は、水（質料）から作られた生成物 (cf. b31-32) と見るか、時間の経過による別のものへの生成変化の基にあるものと見るかという点で異なっている。肉や人間の場合も同様に、現実的に肉や人間であるような生成物と見るか、あるいは、別のものへの生成変化の基にあるものと見るか、という仕方では理解できるだろう。このような理解は、先ほどソクラテスと木製の箱の例で見た「現実態－可能態」の用法——当のものの要素である形相と質料に適用される用法——とは異なっている。もちろん、現実的に酒であるものと可能的に酔であるものと理解した場合でも、個別的な観点から、現実態と可能態が異なっているということと言える。酒の例では、現実的に酒であるものが現実態であり、可能的に酔であるものが可能態である。人間の例では、現実的に人間であるものが現実態であり、可能的に屍であるものが可能態である。確かに現実態と可能態の内容はそれぞれの場合で異なっている。

しかしながら、「というのは」以下の説明が、すべてのものの諸原理としての現実態と可能態を扱っているいまの文脈にふさわしいかどうか、という問題がある。すべてのものの諸原理とし

て形相や質料などが挙げられるとき、或る種類のものの要素としての形相や質料が考えられている。現実態と可能態がすべてのものの諸原理として挙げられる際も、同じ仕方であって、或る種類のものの要素としての現実態と可能態を考えるのが自然である。とくに、或る種類のものが時間の経過によって別のものになるという話は、すべてのものの諸原理についての探究の文脈にふさわしくないように思われる⁽¹⁶⁾。そこで、「というのは」以下についての別の解釈を試みることにしたい。A. Codeによれば、「同じもの」は、例えば酒であるが、「現実的に」と「可能的に」が付加される同じものとしての酒である⁽¹⁷⁾。彼は、そのような酒が、或る場合には、現実的に酒であるものとしてあり、他の場合には、可能的に酒であるものとしてある、と理解する。目の前にある酒が時間の経過によって別のものになるという話はさておらず、「酒」というものを現実的なそれとみなすか、可能的なそれとみなすかが話題になっていると理解するのである。このように理解する場合、「現実態－可能態」は、H巻第6章に見られるような、事物の要素としての形相と質料に適用される対概念であると解することができ、或る種類のものの要素としての現実態と可能態が問題にされていることになる。これは、すべてのものの諸原理について探究しているいまの文脈に合う理解の仕方である。酒の場合は、現実的に酒であるもの（〈酒〉という形相）が現実態であり、可能的に酒であるもの（水という質料）が可能態である。また、人間の場合は、現実的に人間であるもの（〈人間〉ないし魂という形相）が現実態であり、可能的に人間であるもの（身体という質料）が可能態である。個別的な観点から見れば、現実態と可能態はそれぞれの例で異なっている。そして類比的ないし普遍的な観点では、それぞれの例で共通して、現実態と可能態が同じ原理である。このようにCodeの解釈を採用すれば、上の引用は文脈に沿った形で理解することが可能になる。

この解釈は魅力的であるが、「同じもの」をそのように、「可能的に」も「現実的に」も付されていない項のように理解することがはたして自然な解釈と言えるか、という問題がある。やはり、酒、肉、人間が例とされるような「同じもの」は、具体的な酒、肉、人間であると解するほうが自然であると考えられる。この場合は、先に見たように、酒の例で言えば、酒は或るときには現実的に酒であるものであり、他のときには可能的に酔であるものであることになる。この理解が文脈に合わないことは先に見たとおりであるが、この文脈の問題を回避する別の解釈の可能性が残っている。これまでのところ、「というのは」以下は、その前の文、すなわち、個別的な観点で諸原理が異なっていることを示す文を説明していると解していた。この解し方を変えて、「というのは」以下は、前の文の中の一部、すなわち、諸原理が「異なる仕方においてある」という部分を説明していると解することも可能である。つまり、現実態と可能態が異なる仕方においてあると言われていたことに対して、「というのは」以下の説明があると解するのである。酒という同じものが「現実的に酒であるもの」でもあり、「可能的に酔であるもの」でもあると解するとき、「酒であること」と、「酔であること」とがあり方において異なっている⁽¹⁸⁾ことに注意

を向ける必要がある。現実態と可能態が異なる仕方においてあるというのは、「現実的に」と「可能的に」が異なる仕方においてあるということであるが、これは、それらの表現に続く「～である」という部分が異なっているということにほかならない。このように、「というのは」以下の説明がそれに向けられているところの内容を限定的に理解することによって、文脈に合わないと思われる「現実態」と「可能態」の説明をうまく処理することができるようになる。「というのは」以下の説明が向けられていない部分、すなわち、諸原理が「異なるものどもにとっては〔個々のものごとに〕異なっている」という部分については、これまでに説明してきた、事物の要素としての現実態と可能態ということで問題なく理解できるだろう。

3 動かすものへの視座

上に見た一節（Λ 5, 1071a3-7）の後、アリストテレスは、現実態と可能態が事物の諸原因であることに再度言及し（a7-8）、このことを説明するために、形相、結合体、欠如が現実的にあることと、質料が可能的にあることに言及している（a8-11）。形相が現実態であり、質料が可能態であることについては、現実態と可能態を事物の要素としての原理と捉える理解とうまく合っている。しかしながら、結合体および欠如が現実的にあることは、必要のない情報であるように思われるかもしれない。しかし、先ほど見たように、現実的に酒であるものと可能的に酢であるものという理解において、現実的に酒であるものとは目の前にある酒のことであると理解した。この酒は結合体としての酒である。したがって、結合体が現実的にあることへの言及は、いまの文脈において無関係ではないことになる。欠如が現実的にあることについては、当の結合体が生成する前に遡っており、いまの文脈にそぐわないように思われる。例えばソクラテスが生まれる前、魂という形相が欠如した状態があるが、この場合、欠如が現実的にあるというのは、生成前の質料（母親に由来する質料）の存在における欠如を語っていることになる。しかし、先に感覚的物体や色の例を取り上げた際に見たように、形相と欠如とが両極の原理として存在しているという見方も可能である。この見方をここで思い起こして、欠如は両極の一方の原理として現実的に存在しているとも考えることもできる。生成前の質料における欠如を現実的にあると見るのとは異なる仕方でも現実的にあると言われていたのだと解すれば、ここで、欠如が現実的にあると言われることも、いまの文脈にそぐわないわけではないことがわかるだろう。

ここまでで、現実態と可能態が、類比的な観点ではすべてのものにとって同じ原理であり、個別的な観点ではそれぞれの事例ごとに異なっているということが示されたが、現実態と可能態の内容が個々に異なっていることについては、さらに別の見方もあることが続けて示される。そのテキストは以下のとおりである。

そして他の仕方では、同じ質料が属していないものども——これらには同じ形相が属して

おらず、異なる形相が属している——の場合、「現実的に」〔現実態〕と「可能的に」〔可能態〕が〔同じ質料が属していないものどもの間で〕異なっている。例えば人間の原因として、(1) 構成諸要素——すなわち、質料としての火や土と、〔その人間に〕固有の形相 (*to idion eidos*) ——、さらに (2) 外にある他の或るもの、例えば父親、(3) これらのほかに太陽と斜めの円〔黄道〕——これらは質料でも形相でも欠如でも同じ形相のもでもなく動かすもの (*kinounta*) である——がある。(Λ 5, 1071a11-17)

この引用では、「同じ質料が属していないものども」について、それらのそれぞれに適用される「現実態」と「可能態」が、それらそれぞれの場合で異なっているということが言われている。それらは質料が異なるものなのであるから、個々別々のものであり、これは結局、個別的な観点の話ではないかと思われるかもしれない。しかしアリストテレスは、この一節を、個別的な観点到に言及した前の一節の続きとして、「他の仕方では」と断って、書き始めている。したがって、ここで言われていることは、個別的な観点で現実態と可能態が事物ごとに異なっているという話とは異なるはずである。上の引用で挙げられ、比べられている例を見ると、個別的な観点の話とは異なることが理解される。人間の原因が三段階で挙げられている。ここで問題にされている人間は明らかに個別的な人間であるが、まず、上の引用の(1)では、その人間の要素である原理として質料——最近の質料(身体)ではなく遠い質料が挙げられているが——と形相が挙げられる。これらは、本稿の2で確認したように、それぞれ可能態と現実態である。(2)では、その人間の父親が挙げられている。これは結合体であり、これ自体を現実的にあるものとみなすこともできるが、原理が問題にされているいまの文脈においては、始動因としての父親の形相が念頭に置かれ、これが現実態とみなされていると解するのがよいだろう。そうすると、父親の形相の対として、この父親の可能態としての質料も考えることができ、(1)における現実態と可能態が、(2)における現実態と可能態と異なっていることが明確に理解される。次の(3)については、月より下の生成物である人間にとって、月より上の天体等が始動因になっている、ということが前提になっている。この場合の「現実態」と「可能態」をどう理解するかは難しいところであるが、太陽は黄道を移動しており、移動は或る場所から他の場所へという形で成り立っているので(cf. Λ 2, 1069b25-26)、例えば太陽が可能的にA地点にあるというような仕方で可能態を捉えることができるだろう。現実態については、太陽という天体の形相とも理解できるし、太陽の永遠的な運動としての現実活動とも理解できるだろう。いずれにせよ、(1)とも(2)とも異なる現実態、可能態であることは明らかである。

(1)と(2)との間での、現実態としての形相の相違については異論がありうる。現実態としての形相を普遍的な形相と解する者は、その相違を認めたくないだろう⁽¹⁹⁾。しかし、Λ巻第5章では明確に個別的な形相が認められている⁽²⁰⁾。実際、上の引用でも「固有の形相」と言わ

れている。本稿の1のおわりで、個別的な観点というのが、事物の種類ごとに諸原理が異なることについて言われていると説明したが、いま問題にしている(1)と(2)については、事物ごとに異なる視点に立っている。アリストテレスは上の引用を、個別的な観点からの話とは別のこととして説明しようとしているが、上の引用は、どのような観点から、原理としての現実態、可能態が、(1)、(2)、(3)のような事例で異なっていることを示しているのだろうか。しかしこれはそれほど難しい問いではないだろう。引用に示されている「動かすもの」が鍵であることは容易に理解される。動かされるものと動かすものにおける現実態と可能態が比べられているのだから、運動の系列の観点とでも言えばよいだろう。本稿の1で見たように、第4-5章における結論的な考えでは、類比的な観点と個別的な観点があれば、これらの章における諸原理の問題に一定の見方を提示することができる。しかし、アリストテレスの思考のうちには、第6章以降における不動の動者の議論も存在していたにちがいない。その議論の予見が、アリストテレスに、上に引用した、運動の系列の観点からの一節を追加させたのだとすることができるだろう。

おわりに

以上の考察によって、Λ巻第5章における「現実態」と「可能態」について一定の理解を提示することができたと思う。本稿では取り上げなかった第5章後半のテキストでは、アイデア論者への批判も暗に示しながら、原理としての現実態と可能態が個別的であることが示される。その際、先の運動の系列の観点からの続きということもあって、始動因という個別的な原理の存在が強調されることになる。これは、第6章以降における不動の動者についての考察への伏線とも理解できる。Λ巻前半における感覚的事物の諸原理の考察は、このように、始動因という原理への視点が明確にあり、不動の動者を扱う神学への接続が考えられたものとなっている。これに対して、同じく感覚的事物の諸原理について考察しているZH巻のウーシアー論では、始動因への視点がそれほど強く見られない。もちろん、Z巻第7-9章の生成論、Z巻第17章の原因論において始動因への言及が行われている(Z 7, 1032a13-14, 17-18, 24-25, Z 8, 1033a24, b29-32, 1034a4-5, Z 9, 1034a33-b1, b16-18, Z 17, 1041a30-32)。またH巻第6章でも、現実態と可能態とが一つのものなしていることには始動因以外には原因はないという仕方で行われている(H 6, 1045b21-22)。始動因への言及の回数はそれなりに多いが、そのほとんどが、ZH巻のテキストに後から挿入されたとしばしば言われるZ巻第7-9章の生成論にあり、ZH巻全体のウーシアー論において始動因の意義が強調されているわけではない。このことを踏まえると、Λ巻前半と同じく感覚的事物の諸原理について考察しているZH巻のウーシアー論も、Λ巻前半と同じように神学への接続を意識して書かれたものである、というようなことは言えないだろう。それはともかくとして、Λ巻第5章における考察が、第6章から始まる不動の動者に関する考察につながる内容を含んでいることは確かである。もちろん、Λ巻前半の議論と後半の議論との接続につ

いては、Λ巻前半の他の章および後半の章のテキストを注意深く読解すること、そしてそれらのテキストを比較、検討することが必要である。この接続の問題については今後の課題とすることにした。

注

- (1) M. Frede と D. Charles が編集した、Λ巻の各章ごとの論文集が2000年に刊行されたが⁵ (Michael Frede and David Charles, eds., *Aristotle's Metaphysics Lambda: Symposium Aristotelicum*, Oxford: Clarendon Press, 2000)、そのイントロダクションおよびΛ巻第1章についての論文 (Frede による) で、Λ巻をウーシアー論として捉える見方が示されている。最近刊行された、Clarendon Aristotle Series の訳注 (Lindsay Judson, *Aristotle, Metaphysics Book Λ, Translated with an Introduction and Commentary*, Oxford: Clarendon Press, 2019) でも、Λ巻全体を第一哲学の遂行とみなす見方が示されている。そのほか、2014年にはΛ巻の校訂本が二冊 (Silvia Fazzo, *Commento al Libro Lambda della Metafisica di Aristotele*, Napoli: Bibliopolis, 2014, Stefan Alexandru, *Aristotle's Metaphysics Lambda: Annotated Critical Edition Based upon a Systematic Investigation of Greek, Latin, Arabic and Hebrew Sources*, Leiden: Brill, 2014) 刊行され、2016年には C. Horn 編の論文集 (Christoph Horn, ed., *Aristotle's Metaphysics Lambda: New Essays*, Berlin: De Gruyter, 2016) が刊行されている。
- (2) Cf. Judson (2019), pp. 3, 9.
- (3) Judson (2019), pp. 3-4 によれば、Λ巻後半の議論は、自然哲学、魂論、宇宙論、数学的天文学の資料を活用したもので、アリストテレスの天文学と神学についての最良の資料を与えてくれるものである。
- (4) Frede and Charles (2000) においてΛ巻のすべての章について論考が書かれていることもそうであるし、Horn (2016) にΛ巻前半に関する諸論考が収録されていることもそうである。また、Judson (2019) における、Λ巻前半、とくに第4-5章の議論の意義を明らかにしようとする試みも、Λ巻前半の解釈にとって重要である。
- (5) Λ巻第4章の冒頭の一節で、異なるものども (諸実体と諸属性) の諸原因・諸原理が、異なるものどもの間で異なっているのか、同じであるのか、という問題が示されている (Λ 4, 1070a33-35)。ここで、「異なるものども」として「諸実体」と「関係的なものども」が挙げられ、これらが同じか異なるかが問われるが、その際、「諸々のカテゴリーのそれぞれ」についても同様の問いが成り立つことが示されている。この後のテキストでアリストテレスは引き続き、「諸実体」と「関係的なものども」に言及するが、関係的なものどもは非実体カテゴリーを代表するものとみなされていると理解できる。Cf. W. D. Ross, *Aristotle's Metaphysics: A Revised Text with Introduction and Commentary*, II, Oxford: Clarendon Press, 1924, p. 359, Judson (2019), p. 143. なお、「異なるものども」は、この冒頭の一節でも、「すべてのもの」と言われているが (a33)、この「すべてのもの」はこれら諸実体と諸属性のすべてという意味に理解できるだろう。あるいは、Λ巻第1章のはじめで、万有が、実体と属性を部分としてもつ全体として説明されていることから (Λ 1, 1069a19-21)、諸実体と諸属性とで「すべてのもの」ということになるとも言えるだろう。
- (6) 感覚的物体は、熱と冷とこれらの担い手 (質料) を原理としてもっている。こうした諸原理からなるものは実体 (結合的な実体) である (Λ 4, 1070b13-15)。感覚的物体という実体が挙げられ、その形相、欠如、質料が問題にされているときに、熱という形相と冷という欠如が挙げられる——実体的な形相とその欠如が挙げられるべきであるのに属性的な形相とその欠如が挙げられる——ことについて、M. Crubellier は、アリストテレスのプラトン批判において実体の諸要素が実体であるとされることを持ち出して、ここで、実体的な熱とか実体的な冷のようなものが考えられていると解している。ただし、これは、熱や冷が文字どおりにウーシアーであるということではなく、実体的な形相を例に挙げると、その欠如を反対のものとして明確に示す

ことができない、という問題との絡みで言われている。熱という形相を仮に実体的な形相として挙げれば、その欠如は熱の反対のもの（冷）として明確に示すことができる。Cf. Michel Crubellier, 'Metaphysics Λ 4', in Frede and Charles (2000), pp. 149-150.

- (7) Ross (1924), p. 358は、事物の種類 (class) ごとに諸原理が異なるという仕方で説明している。
- (8) 「人間」という語は、種としての人間や個物（質料と形相からなる結合体）としての人間を指す以外に、形相としての人間を指すこともある (cf. Z 8, 1033a28-31, Z 10, 1035b1-3)。形相の場合について、指されているのが形相であることを示すために「〈 〉」でくくることにする。
- (9) ちなみに、『形而上学』Z巻第7章において生成の過程について説明が行われる際、身体が健康であるためには熱と冷との均衡状態 (*homalotês*) がなければならないと言われている (Z 7, 1032b7-8)。
- (10) 『カテゴリー論』第10章における「反対のもの (*enantion*)」の説明において、反対のものである白と黒が、必ずしもどちらか一方が基体としての物体のうちにあるわけではなく、それらの中間にさまざまな色合いがあることが示されている (*Cat.* 10, 12a11-13, 17-21)。
- (11) Ross (1924), p. 360は、Λ巻第4章における形相と欠如の解釈にあたって、『気象論』のこの箇所と『生成消滅論』の関連箇所を挙げて、形相と欠如が両方とも結合体のうちに含まれているとする解釈の可能性に言及している。しかし Ross は、『自然学』第1巻第6-7章とのつながりのほうを重視して、欠如を生成前に存在するものとみなし、結合体の構成要素とは認めない——アリストテレス自身は形相、欠如、質料を「〔結合体の〕うちにあるものども (*ta enuparchonta*)」とみなしているが (Λ 4, 1070b22) ——という解釈のほうを採用している。
- (12) Cf. Judson (2019), pp. 136-139.
- (13) Ross (1924), ad loc. も、Werner Jaeger, *Aristotelis Metaphysica*, Oxford: Clarendon Press, 1957, ad loc. も、最近の解釈たちも、'*tauta*' (指示代名詞) ではなく '*tauta*' (*ta auta* の母音融合した形) という修正された読み方を採用する。Cf. Alan Code, 'Some Remarks on *Metaphysics* Λ 5', in Frede and Charles (2000), p. 165, Christof Rapp, 'The Principles of Sensible Substance in *Metaphysics* Λ 2-5', in Horn (2016), p. 106, Judson (2019), pp. 27, 372-373. 解釈者たちが説明するように、前者の読み方では、「それら」が、離れてありうるものとしての実体を指すことになり、この「それら」が後で (Λ 5, 1071a3)、「魂と身体」ないし「知性と欲求と身体」であることになり、魂や身体などが、離れてありうる実体であることになる。しかし、離れてありうる実体とみなせるのは、魂と身体との結合体である個物などである。解釈者たちは後者の読み方を採用し、「すべてのものの諸原因は同じである」ということによって、実体の諸原理のことが言われていると解する。実際、第5章の後半で、実体の諸原因が実体以外のものどもの諸原因であると説明されている (a24-25, 34-35)。ただし、解釈者たちも言うことであるが、実体以外のものどもの原因はまず実体であり、そして実体には質料や形相といった原因があるので、実体を原因とする他のすべてのものにとっても、実体の諸原因が原因となるということである。
- (14) 実体以外のものが実体から離れてありえないという『カテゴリー論』以来の見解に実体の原因性を読み取ることは重要である。Code (2000), pp. 163-164は、『カテゴリー論』における究極的な基体（第一実体）の原因性を、『自然学』第1巻第7章において属性的生成（変化）の基体（第一実体）が原理・原因とされていることと結びつけて、実体がすべてのものの原因であることの説明を行っている。また Rapp (2016), pp. 106-107も、実体が他のすべてのものの原因であることを重要な主張とみなした上で、実体の諸原因が他のすべてのものの原因とされることに言及している。
- (15) Cf. Jaeger (1957), ad loc.
- (16) 「現実的に酒であるもの」については、この「現実的に」を、〈酒〉という形相に適用される用法と解すれば、いまの文脈にふさわしいものとなる。しかし、「可能的に酔であるもの」との対比を考えると、「現実的に酒であるもの」は現にある生成物としての酒であると考えるのが自然だろう。
- (17) Cf. Code (2000), pp. 167-169.

- (18) 「酒であること」と「酢であること」の違いは、酒の何であるか（本質）と酢の何であるか（本質）との違いによって理解される。例えばアリストテレスは『自然学』第1巻第7章において、同じ基体を「人間」と捉えることと「無教養なもの」と捉えることの違いを説明する際に、「人間にとってあること〔人間の何であるか〕」と「無教養なものにとってあること〔無教養の何であるか〕」との違いに言及している（*Ph.* I 7, 190a17, 191a1-2）。
- (19) アリストテレスは個別的な形相を認めていたとする個別形相論者と、形相は普遍的なものであるとする普遍形相論者との論争がある。これについては、拙著『アリストテレスの存在論——〈実体〉とは何か』早稲田大学出版部, 2015, pp. 188-189, 200-204, 214-215を参照。ちなみに、Code (2000), pp. 178-179は、Λ巻第5章後半における個別的な形相への言及に対して、個別的な形相を認めることなく、個別的な観点におけるそれぞれの事例での諸原理の相違を説明しようと試み、諸原理を「集合的に (collectively)」扱う視点を提示している。これは普遍形相論者にとっては都合のよい解釈の仕方であるが、テキストの自然な読み方であるとは言えないだろう。
- (20) ちなみに、Z巻第11章において個別的な結合体と普遍的な結合体との区別が行われているが、その際に言及される個別的な結合体の形相は個別的な形相であると考えられる（Z 11, 1037a5-10）。またZ巻第13章において、ウーシアーとしての形相が個物に固有のものであると主張されており（Z 13, 1038b10）、これも個別的な形相と解することができる。Z巻第13章におけるこの主張については、拙著 (2015), pp. 193-200を参照。

本稿は早稲田大学特定課題研究助成費による研究成果の一部である。